〈論文〉

月への咆哮

――中島敦「山月記」考――

堀　誠

一　「記」と「伝」

二〇〇九年は、中島敦、太宰治をはじめとする明治四十二年（一九〇九）生まれの作家たちの記念すべき生誕百年の年回りとなっていた。[1] 片や太宰の「走れメロス」は中学校の安定教材となり、片や中島の「山月記」は高等学校の安定教材となっている国語科教材の現状には、同年生まれの作家の奇しき縁を思わざるを得ない。その「山月記」を含めて中島敦の作品をタイトルの面から考えてみるとき、たとえば、一見中国の史伝もの流の命名にもみえる「李陵」には、作家の死後に深田久彌が「中央公論」昭和十八年七月号に掲載発表するに際して「まだ草稿のまゝ、題さへついてゐない」作品を「いま仮に僕が「李陵」と附けておいた。」といういわれがあった。あらためて「李陵」なる作品名が中島自身の命名にはならないことを確認する一方、「名人伝」や「山月記」「狼疾記」という作品においては、その「伝」や「記」による命名そのものがこの作家と作品を考える上での根源的な問題を内在しているように思われてならない。

この「記」と「伝」について考えるとき、中島敦の「山月記」に関する教材研究を含めた論考類の中で、昭和六十三年（一九八八）十一月十二日に日本近代文学会関西支部秋季大会（甲南大学）で開催されたシンポジウムの記録の意味をもつ「シンポジウム「山月記」をめぐって」[2] に大いに啓発された。その第一番目のシンポジアスト木村一信は、「素材の「人虎伝」をめぐって」の部分で、明治に刊行された『国訳漢文大成』第十二巻の「晋唐小説」[3] に着眼し、「この「晋唐小説」を中島が読んだ、「解題」を眼にしたであろうと推測するならば」と仮定して、「「下第不遇の秀才輩が仙侠・艶情を藉りて、無聊不平の感慨を吐露せしもの」との一文、このあたりがひとつのヒントと言いますか、中島の心を捉え、この素材に着目させた一要因になるのではないだろうかと思われます。」との推測を提示し、かつ、材源の「人虎伝」から「山月記」へのタイトルの変更について、「「伝」というのは、もともと一代記とか生涯の記録といった意味ですが、人が虎になる話、虎

になった人間の生活の記録から、もともと、事の顛末を書き記したものとの原意をもつ「記」である「山月記」へと変貌させる意図は中島にあったはずです。そこで、「山月」という語が意味をもってきます。」と述べ、「この〈山月〉を物語全体の主たる舞台とし、その舞台で演じられた一人の人間、近代人の事件の記録であるというように、「記」を捉えたいと思います。」と指摘する。この「記」と「山月」とを注視する見地は重要なものであろう。また、第二のシンポジアストとして登場した濱川勝彦は「「人虎伝」との関わり」の部分で、中島が加えた改変から「人虎伝」と「山月記」の違いに言及し、「記」に関して、「中国の『文体明弁』というような本によりますと、「記」は叙事を以て主となす、即ちある事柄の顛末、由来を書くのである。」と指摘して、「人虎伝」の「後日談のカットの一因には、やはり「山月記」の「記」という様式があると思われます。」と論及している。

『文体明弁』は明の呉訥の『文章弁体』を主体としてこれを明の徐師曾が損益したものといい、中国から渡来するとともに、寛文六年（一六六六）に和刻本[4]が刊行されて、日本の風土の中で文体の受容に大きな役割を果たした。その和刻されたテキストは、六十一巻・附録十四巻と大部に過ぎることもあり、元禄七年（一六九四）八月には、野間三竹が抄出した『文体明弁粋抄』二巻が刊行されたのをはじめ[5]、その後、明治十一年（一八七八）に至って大郷穆（おおごうぼく）（一八三〇～一八八一）が抄出した『文体明弁纂要』も印行されていた。このように、中島の時代に近接して抄本の類も流通して『文体明弁』の所説はかなり受容されたことが明らかになる。[6] いま『文体明弁』和刻本の本文から引用（返り点ならびに訓読は訓点に依る）してみると、巻四十九の「記一上」の冒頭に元の潘昂霄の『金石例』（碑碣の制等を記した書）を引いて「記者紀レ事之文也。（記は事を紀するの文なり。）」と記した後の部分に、

其文以レ叙レ事為レ主。後人不レ知二其体一、顧以二議論一雑レ之。（其の文　事を叙するを以て主と為す。後人　其の体を知らず、顧（かえっ）て議論を以て之に雑（まじ）ふ。）

「記」が「事を紀す」、すなわち「叙事（事を叙す）」を主体とすると同時に、そこに「議論」を注入加味する事情を指摘している。これに対して、第五十八の「伝一上」において、「按字書云、伝者伝（平声）也。（按ずるに字書に云ふ、伝は伝（平声）なり。）」と記すとともに、

紀二載事迹一、以伝二於後世一也。自二漢司馬遷作二史記一、創二為列伝一、以紀二一人之始終一、而後世史家卒莫二能易一。（事迹を紀載して、以て後世に伝ふるなり。漢の司馬遷の史記を作り、列伝を創為して、以て一人の始終を紀して自り、而して後世の史家卒に能く易ふること莫し。）

「伝」は、ある「事迹を紀載」して後世に伝えるのであり、漢の司馬遷が『史記』を書いて「列伝」を創り、「以て一人の始終を紀す」こととなり、後世の史家はその筆法を変えなかったと説く。

しかも、ここに確認し得る文章観は、近代日本における中国の小説、とりわけ唐代小説の理解と摂取にあっても脈絡をもったこ

とが明白化する。先の「晋唐小説」には塩谷温の「解題」があり、その「唐代小説」に関する冒頭部分に、

唐代小説は短篇なりと雖も、一人一事に関するまとまりたる紀載なり。

と記述する。その「一人一事に関するまとまりたる紀載」との文言は、『文体明弁』に確認される「叙事」と「紀一人之始終」の記載を援引融合したもののように解される。

「晋唐小説」は中島が読んだと推測される「人虎伝」を収載することでよく知られるが、すでに述べたごとき「記」と「伝」の概念をもって中島敦の作品を見たとき、タイトルに「記」をもつ「名人伝」や「伝」を有する「山月記」はどのような作品と理解することができるであろうか。

二　「山月記」なる所以

唯一「伝」の呼称をもつ「名人伝」は、弓矢の名人紀昌をめぐる作品であることに異論はなかろう。典拠は『列子』「湯問」篇等の記載になるが、『列子』「湯問」篇では、まず甘蠅、飛衛、紀昌にいたる師弟の系譜が書かれるのに続いて、紀昌が飛衛の教えを受けて瞬かざるを学ぶ話題に展開する。この点に着眼すれば、「名人伝」は、甘蠅、飛衛、紀昌にいたる射の名人たちにまつわる伝的な要素を排して、紀昌に的を絞った叙述構成をとっている。すなわち中島は、『列子』等に材料を得るとともに、新たに紀昌という一個人の「伝」を創出した――『文体明弁』の言辞を借りれば「一人の始終を紀」したことを、そのタイトルの「伝」の文字が物語っているということができる。「名人」の語は紀昌という一個人を特定するわけではないが、その弓矢の名人の「伝」としての意味が提示される。

「名人伝」が「伝」を名乗る所以がそこに内在しているとも思われるが、「山月記」の場合はどうか。「人虎伝」を題材としていながら、「人虎伝」の名を踏襲することはなく、また「記」をタイトルに用いるにしても既存の「人虎」を採って「人虎記」と折衷することもなく、新たに「山月記」の題をもって命名して「人虎伝」を新生させている。[8] 唐代伝奇には元稹の「鶯鶯伝」のように「会真記」なる別名をもつ作品例のあることをも含めて、その「人虎伝」から「山月記」への題名の改変については、作品論的な立場から多くの考説の余地が残されているように思われてならない。

「人虎伝」から「山月記」に新生した中島敦の小説は、どこにその真面目があったろうか。「人虎伝」のストーリーをそのまま襲用はせず、取捨選択に加えて叙述順の変更を施していたことは、テキストの対比を踏まえて異口同音に指摘されることでもある。その変貌の中で最も重要なのは、「人間であつた時、己は努めて人との交を避けた。」にはじまり「これが己を損ひ、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形を斯くの如く、内心にふさはしいものに変へて了つたのだ。」にいたる、李徴が自ら語り明かした自己分析の部分であろう。その言説こそ詩人たる李徴の内面世界を説いたものとして重みを持つ。

ここに「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」「猛獣使」「猛獣」「性

情」「虎」といった語をキーワードとして展開する自己分析は、明の徐師曾が『文体明弁』にいう言説を借りれば、「叙事」、すなわち一官吏の虎への変身という奇事を叙することを主体とする「記」の言語空間の中にあって、そこに雑えられた「議論」に他ならぬもので、それこそ本作品における「記」たる所以の言説に当たるものではなかろうか。そこにいわゆる「記」を新たに名乗る積極的な意味を見出すことが可能となる。まさに依拠する「人虎伝」がもつところの、「一人の始終」を記す「伝」の大枠を脱却して、新たに「記」を掲げる所以でもある。といって、短絡的に「人虎」の文字を継承することはなく、「山月」の文字を伴って「山月記」と命名したのは何故か。[9]

「山月記」というタイトルに認められる「山月」の語は、「山月記」の作中のどこにも無い。のみならず、李徴の詠じた即興詩に「明月」の語が出現する以外には「残月」といった明け方の月、朝まだきの月しか現れない事実は、大いに重要で注目されるべきものである。しかも、原拠となる「人虎伝」には、そもそも李徴の即興詩中の「明月」を除けば、不思議にも「月」は全く描かれない事実が確認できることを特記しておきたい。かくて「山月記」は、即興詩中の「明月」を核として「月」の叙述を作為するところに成ったということができる。以下には、「山月記」に現れる「月」を順次に検証してみよう。

三　「山月」と「月」のイメージ

まず冒頭部分で、早立ちをした袁傪が猛虎と遭遇する場面に初めて「月」が出現する。

残月の光をたよりに林中の草地を通つていつた時、果して一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。

「残月」は明け方近くの月、夜明けの空に消え入りそうな月、有明の月である。この「残月」を最初として、偶然再会を果たした袁傪との語らい、李徴の詠じた「旧詩」の筆録に続いて、李徴が「今の懐」を即興で詠じてみせた七言律詩の尾聯上句に現れる「明月」が、「山月記」中の第二の月となる。[10]

偶因狂疾成殊類　災患相仍不可逃
今日爪牙誰敢敵　当時声跡共相高
我為異物蓬茅下　君已乗軺気勢豪
此夕渓山対明月　不成長嘯但成嗥

いずこをも誰をも照らす「明月」は、その明るく透明な光で、暗闇をあまねくしっとりと洗うがごとくに照らし注ぐ。「明月」を含んだこの詩を「今の懐」として詠出するや、再び「残月」をとらえたナレーションが向けられる。これが第三の月となる。

時に、残月、光冷やかに、白露は地に滋く、樹間を渡る冷風は既に暁の近きを告げてゐた。人々は最早、事の奇異を忘れ、粛然として、この詩人の薄倖を嘆じた。

詩中の「明月」を挟んで、「残月」は「光冷ややかに」、あるいは「冷風は既に暁の近き」と時間的な推移を示して描かれると同時に、ナレーションは「李徴の声は再び続ける。」と転じる。その声が展開するのは、「何故こんな運命になつたか判らぬと、先刻は言つたが、しかし、考えように依れば、思い当たることが全

然ないでもない。」に始まる、先に「山月記」の「記」たる所以と位置づけた自己分析の言動に他ならない。その間、「まして、日毎に虎に近づいて行く。」中で、「どうすればいいのだ。己の空費された過去は？　己は堪らなくなる。」と告白すると同時に、「そういう時、己は、向うの山の頂の巌に上り、空谷に向つて吼える。この胸を灼く悲しみを誰かに訴えたいのだ。」と内なる衝動を伝え、かつ、

己は昨夕も、彼処で月に向かつて咆えた。誰かにこの苦しみが分つて貰へないかと。

と述懐する。この咆哮が向けられた対象としての「月」が、第四の月である。そして、

しかし、獣どもは己の声を聞いて、唯、懼れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎が怒り狂つて、哮つてゐるとしか考へない。

との言動に、「己の声」を一匹の虎の咆哮としか考えない物体としての「月」が現れる。これが第五の「月」である。かくて「酔はねばならぬ時が、（虎に還らねばならぬ時が）近づいたから、」と虎への変身を自覚する中、妻子が飢凍に苦しむことが無きよう哀惨に託するとともに、自嘲的な口調にもどった李徴は決別に当たって、最後に今の姿を披露してみせる場面にまた月が描かれる。

一行が丘の上についた時、彼等は、言はれた通りに振返つて、先程の林間の草地を眺めた。忽ち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼等は見た。虎は、既に白く光を失つた月を仰いで、二声三声咆哮したかと思ふと、又、元の叢に躍り入つて、再びその姿を見なかつた。

このエピローグにおいて「月」はすでに「残月」から「既に白く光を失つた月」に変じて、朝まだきの薄明の時間を告げている。これが第六の月であり、作中の最後の月となった。

以上のように、月は作中に随時に現れるものの、「山月」そのものは出ず、それに辛うじて近似する月は、李徴の即興詩に詠まれた「渓山対明月」の「明月」でもあろう。

ここで「山月」の語に関していえば、一つに想起されるのが盛唐の李白の五言絶句として著名な「静夜思」の詩句である。

牀前看月光（牀前　月光を看る）
疑是地上霜（疑ふらくは是れ地上の霜かと）
挙頭望山月（頭を挙げて山月を望み）
低頭思故郷（頭を低れて故郷を思ふ）

霜のごとき月の光に誘われて、ふと頭をもたげて「山月」（山の端の月、山にかかった月）をうち眺めれば、思わず頭を垂れて故郷を思わざるを得ない、と唱う。その詩句は、興膳宏が「月明の中の李白」[11]において、「「山月」と「故郷」との関係が、これ以上明白な表現はない対句によって指示されている。」と評していたが、その月を見る行為と望郷の念を抱く相関性は、盛唐の杜甫の「月夜」にもそのありようをうかがうことができる。

今夜鄜州月（今夜　鄜州の月）
閨中只独看（閨中　只だ独り看るならん）
遙憐小児女（遙かに憐れむ小児女の）
未解憶長安（未だ長安を憶ふを解せざるを）

香霧雲鬟湿（香霧　雲鬟　湿ひ）
清輝玉臂寒（清輝　玉臂　寒からん）
何時倚虚幌（何れの時か　虚幌に倚り）
双照涙痕乾（双び照らされて　涙痕乾かん）

長安の都に身を置く杜甫は、遠く離れて鄜州の地（陝西省富県）に暮らす妻子の身の上を案じる。杜甫は長安を照らす月を看つつ、鄜州で妻が独りで同じ月を看ている光景を想起しつつ、将来における無事の再会に思いを馳せている。

この月を介しての心象の回路は、この杜甫「月夜」をめぐる『唐詩解釈辞典』の「備考」（植木久行）[12]に次のような指摘がある。

詩は終始、「月」を中心として展開する。月は古来、あまねく天地を照らすところから、時間・空間を異にする両者を結びつけるものとして歌われ、従って離別の人や昔の人をしのぶ素材として用いられることが多い。しかしこの詩のように、思慕する相手から突如歌いおこす発想は、極めて斬新であり、当時の杜甫の切迫した心情を表すかのようである。

「月夜」の発想の斬新さは措いて、傍線部を施した部分に明瞭なように、月は人を想うよすがであり、それを眺める両者の心を繋ぐものであるとの指摘は重要である。

「山月記」に詠まれる「明月」の形状は詳らかには書かれないが、月が満ちた「満月」の丸い形状は、「団円」の意味を内在する。中秋の名月に丸い形状をした「月餅」を食するのも、家族の団欒や団円を象徴する習俗に他ならない。あわせて、その丸い形状は、いわゆる銅鏡の形状に通じるもので、満月の比喩に「鏡」の用いられることも知られる。李白「把酒問月」（酒を把りて月に問ふ）には、その第五句に、

皎如飛鏡臨丹闕（皎として飛鏡の丹闕に臨むが如し）

という詩句表現があり、『唐詩解釈辞典』李白「把酒問月」「語釈」（植木久行）には、「皎」は「白く清らかに輝くさま。」をいい、「飛鏡」は「空を飛ぶ鏡。輝く満月の比喩（昔の鏡はみな丸かったため。六朝以来の用法）。」のように注釈が施される。その「鏡」は、映し、照らしだす機能を持つことは言うまでもない。また、唐の孟棨の『本事詩』所載の「破鏡重円」の故事―陳の後主に仕えた徐徳言が、国の滅亡に際して妻が再会を約して二つに割った鏡を手掛かりに再会を果たして復縁重円する―もある。[13]また、「破鏡」は『玉台新詠』巻十所収の「古絶句」の第四句に、

破鏡飛上天（破鏡飛びて天に上る）

のように読み込まれてもいる。[14]

以上のような月をめぐる文学的な属性を考えあわせた時、タイトルの面で「人虎伝」から「山月記」に新生した「山月記」はどのような作品であると意味づけられようか。

四　月への咆哮

人間が虎に姿を変えるという奇事によりつつ、虎に変わりいく李徴の心の航跡とその苦衷を追跡するのが「山月記」のストーリーであろうが、その異類に変じてしまった苦衷は李徴自詠の即興詩にうかがうことができる。その即興詩には、

今夕渓山対明月

不成長嘯但成嗥

と、「今夕」渓山が明月に対する中で虎として嗥える身に化する事実を詠じる。「長嘯」は、口をすぼめて声を長く引くこと、引いては詩歌を朗吟する、また歌を詠作する意味にもなる。[15]「嘯」は、本来、唇・舌・歯などの口喉器官を用いて、腹腔から呼気を押し出して音曲をなす口技をいった。[16] あるいは、虎が長く呼気を引いて唸ることを「虎嘯」といった。「虎嘯風生（虎嘯きて風生ず）」[17]は、英傑が時宜を得て勇躍することを意味する。「嗥（嗥）」は、獣がほえる意。長く声を引いて吟ずることもできないことを詠じ、引いては詩人としても成就することなく、虎の咆哮をなすのみとなった境遇を詠ってもいよう。かつ、「残月、光冷ややかに」という第三の月が出現したあとの自己表白の中でも、

己は昨夕も、彼処で月に向かつて咆えた。

と語る。ここに出現した「昨夕」と先の「今夕」とに共通して使われる「夕」字は、三日月を描いた象形文字で、月の出る「よる」の意味が本義である。先の「今夕」が、今夜の意を表すことはいうまでもない。一方の「昨夕」もまた、昨日の夜を意味するのであろうが、「山月記」の作中にあっては、もはや「明月」が「残月」となった、朝の到来を自覚させる時間の中で発せられた李徴のことばの中にある。つまりは、「昨夕」は、翌朝に近い時点から遡って発せられたもので、この「昨夕」が意味する時間は、詩中にいう「今夕」と同様の時間を指し表しているものといえる。しかのみならず、その詩句にいう「渓山　明月に対す」る中で「嗥を成す」とは、「彼処で月に向かつて咆え」る行為をいったものにほかなるまい。

その咆哮は、渓山を照らす明月に対し、その明るい光に洗い出されての内なる衝動の発露にほかならず、明月に鏡の機能を補いみれば、皎々と照らす鏡としての月を介しての自己観照による衝動とも解し得よう。その自己観照と自己分析とを通じて、その性情に虎なる「猛獣」を飼いふとらせることとなった次第を自ら語り明かすとともに、自らの旧作を袁傪に託する願望を果たし得たもう一方で、

だが、お別れする前にもう一つ頼みがある。それは我が妻子のことだ。

と切り出し、最後には慟哭の声とともに、

本当は、先づ、此の事の方を先にお願ひすべきだつたのだ、己が人間だつたなら。

と人間としての己を見つめ、「飢ゑ凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を気にかけてゐる様な男だから、こんな獣に身を堕すのだ。」と内省して語り明かす。

ここに妻子の生活への援助を願わずにおれない李徴が、最後にはいる。その思いは、「渓山　明月に対す」る中で、明月そのものを眺め、明月に触発されて故人を、家族を、故郷を懐かしく思い起こし、今はかなわぬ再度の団円を思うよりほかの何ものでもない。その意味で、明月が家人を思うよすがとなる中国古典詩歌の発想が底流することは言うまでもない。

実は、この袁傪に対する家族への援助の依託は、「人虎伝」では、旧詩の筆録を頼むのよりも前に、まず第一に願い出ている事

実がある。その「山月記」における依託の順序の変更は、詩業への断ちがたい思いを強調し、人間性の欠落を浮き彫りにする作為のなせる技であったことが明らかである。

しかしながら、人間としての心と肉体とが失い尽くされようとしている李徴にとっては、明月の光こそあれ、その満月に象徴される「団円」、家族との将来的な再会の実現は望むべくもない。しかも、エピローグに認められる「既に白く光を失つた月」は、李徴の心と肉体が間も無く喪失することを暗喩し、その月を「仰いで、二声三声咆哮したかと思ふと、又、元の叢に躍り入つて、再びその姿を見なかった。」と結ぶ。

渓山の中にあって、舞台となった叢にもはや李徴なる主人公の姿はなく、白く光を失った月が微かに照らす叢周辺の舞台装置のみが残されたといってよい。それは中学校のもう一つの安定教材となっている魯迅の小説「故郷」の最後の場面に共通するものでもあろう。

このように「山月記」は、「山月」として出現する明月を介しての、李徴の自己観照の物語とは解し得ないであろうか。そこには今はかなわぬ望郷、妻子への追懐も含まれる。ある意味では、「今夕渓山対明月　不成長嘯但成嗥」の詩句に照射された李徴の心象を「山月」をもって作品名に象徴化し、「長嘯」をなしえず、詩人としても「虎嘯」を成し得なかった人間の性情を剔ったとはいえまいか。

「記」と「伝」をキーワードとしての一つの作品への見方を示して論考を展開してきたが、虎の、否、李徴の「咆哮」は、萩原朔太郎が大正六年（一九一七）二月に刊行した『月に吠える』（処女詩集）の意味に等しく、まさに近代的自我の覚醒とその表出とに関わるものである。月に照らされた自然の空間における自己観照は、まさに東洋的な世界観の中に息づいている。因みに、西洋では月は愛でる対象とはならず、英語のlunaticの語源は、月の霊気に当たると気が狂う、狂気は月の光の影響によるというラテン語に由来するという。そして、満月を見ると狼に変身する「狼男」の伝承の世界が広範に行き渡っている。そうした西洋とは明らかに異質な東洋的な時空が「山月記」には確かに流れていることを付言しておく。

〔注〕

(1)『大人読み『山月記』』（二〇〇九年六月、明治書院刊）第四章所載の勝又浩「生誕一〇〇年目の中島敦」の「同年生まれの文学者たち」には、中島敦に続いて、津村信夫、太宰治、菱山修三、花田清輝、野田宇太郎、長谷川四郎、佐藤佐太郎、中里恒子、大岡昇平、内村直也、松本清張、中村武志、飯沢匡、埴谷雄高、井上友一郎、小堀杏奴、斎藤史の都合十七人を挙げている。

(2) 問題提起者：鷺只雄・濱川勝彦・木村一信、司会：吉田永宏。「国文学解釈と鑑賞」平成二年四月号所載。のちに勝又浩・山内洋編『中島敦『山月記』作品集　近代文学作品論集成⑩』所収、二〇〇一年十月、クレス出版刊。

(3) 大正九年（一九二〇）十二月、国民文庫刊行会刊。大正十年七月再版発行、大正十二年三月三版発行と版を重ねている。なお、『古今説海』『唐人説薈』所収のいわゆる「人虎伝」には、李徴が即興で詠んだ七言律詩

が載る。

(4) 京都東六条の伊東氏の刊行になる。本書は、嘉永五年（一八五二）に再版されている。なお、注（6）に示す早稲田大学に蔵される坪内雄蔵寄贈の『文体明弁』は、この京都の謙謙壺蔵版による再印本である。

(5) 寛政六年（一七九四）八月には、顕常（大典）校の『文体明弁粋抄』が刊行され、さらに明治に補刻された版も印行された。

(6) 早稲田大学図書館には、明治三十六年十一月五日に坪内雄蔵（逍遙）の寄贈した『文体明弁』が蔵されている。その後、昭和二十四年に国劇向上会から譲渡された「逍遙文庫」には、『文体明弁粋抄』が蔵されており、おそらく坪内逍遙もこうした『文体明弁』や『文体明弁粋抄』などを通して中国の文章や文体について考えたことを推測させる興味深い資料となっている。なお、「昭和二十八年五月五日現在、中島家に保存されている関係図書一覧表」である田鍋幸信「中島敦蔵書目録」（『日本文学研究資料叢書　梶井基次郎・中島敦』所載、昭和五十三年二月、有精堂刊）には、『文体明弁』に関連する書の存在を確認できない。

(7) 原文には、「甘蠅、古之善射者。彀弓而獸伏鳥下。弟子名飛衛、学射於甘蠅、而巧過其師。紀昌聞之、又学射於飛衛。」と最初に記す。

(8) 「山月記」という作品のタイトルに関して、勝又浩「『山月記』と『名人伝』」（『中島敦の遍歴』所載。二〇〇四年十月、筑摩書房刊）の「『山月記』について」の中で、「中島敦は原典である「唐晋小説集」『人虎伝』の即物的に過ぎるタイトルを嫌ったのであろうが、」と指摘するとともに、「記」について、「漢文の用法では元来ものの由来を示す字なのだ。従って「山月記」とは山と月の由来、という意味になってしまって、李徴の悲劇とずれてしまう。だからこの「記」は、藤原定家『明月記』などと言ったときの「記」と同じ、日本的な用法なのである。」と自説を展開している。しかし、その「記」に関する理解には与しかねるものである。その認識のズレこそが「記」や「伝」に対する個人間の経験値的な異相を示してよう。

(9) 注（2）所掲の「シンポジウム「山月記」をめぐって」において、第一番目のシンポジアストの木村一信は、「素材の「人虎伝」をめぐって」の部分で、「記」という文体と「山月」という語とに注目して、「この〈山月〉を物語全体の主たる舞台とし、その舞台で演じられた一人の人間、近代人の事件の記録であるというように、「記」を捉えたいと思います。」と指摘する。この「記」と「山月」とを注視する観点は、本論考の試みに通じるものがある。

(10) 「山月記」には、詩句を白文のみで載せるので、「晋唐小説」所載の「人虎伝」から訓読を引用しておく。「偶たま狂疾に因つて殊類と成り、災患相仍りて逃るべからず。今日爪牙誰か敢て敵せん。当時声跡共に相高し。我れ異物となる蓬茅の下、君已に軺に乗り気勢豪なり。此夕溪山明月に対し、長嘯を成さずして但嗥るを成す」。また、『支那文学大観』第八巻「唐代小説」所載の「人虎伝」で今東光は、「偶たま気ふれて／このからだ／このわがつみは逃げられぬ／けふ誰あつて／我れに敵するものぞや／風評／隠るる所なし／けものとなつて／今し草陰／君は軺に／勢ひ豪／このたそがれに渓をながめ／尾根にのぼる明月を仰いでは／嘯くをせず／あはれ嗥ゆる」と訳出している。

(11) 「中国文学報」第四十四冊（一九九二年四月刊）所載。

(12) 松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』（一九八七年十一月、大修館書店刊）。

(13) テキストによっては「破鏡」を「破照」のごとく表記し、「照」が「鏡」の意味で用いられた用例もある。

(14) 「古絶句」の第二句「藁砧今何在（藁砧　今　何くにか在る）」は、「藁

砧」の「砧」が「砆」字と同義となる。「砆」字は「夫」に音通して、夫はどこにいるかとの意味になる。第二句「山上復有山（山上　復た山有り）」は、「山」字に「山」字を重ねて「出」の字となり、他出している意となる。第三句「何当大刀頭（何か当に大刀の頭なるべき）」の「大刀頭」は、「大刀」の「頭」の部分には形態的に「環」が付帯している。「環」は還・還を意味する「還」に音通し、夫の還りがいつごろかとの意味を表す。第四句「破鏡飛上天（破鏡飛びて天に上る）」の「破鏡」は、形状としては半月であり、上弦あるいは下弦の月が天空にかかる時節を指していう。ただ、「破」字を、満ちた月が欠ける意に解すれば、下弦の月の出る時節との解釈となろう。この「古絶句」は、いわゆる隠語詩として知られている。

(15) 次に示す王維の「竹里館」には、この李徴の即興詩に認められる「長嘯」と「明月」の語が用いられている。「独坐幽篁裏、彈琴復長嘯。深林人不知、明月来相照。」

(16) 澤田瑞穂「嘯の源流」（『東方宗教』第四十四号、昭和四十九年十月、日本道教学会刊。『中国の呪法』所収、一九八四年十二月初刷、一九九〇年五月修訂版、平河出版社刊。）を参照。

(17) 「虎嘯」の語は、張衡「帰田賦」に「爾廼龍吟方沢、虎嘯山丘。」、陸機「漢高祖功臣頌」に「龍興泗濱、虎嘯豊谷。」、陸雲「南征賦」に「猛将起而虎嘯。」といった用例がある。また、李白の「経下邳圯橋懐張子房」には、「子房未虎嘯、破産不為家。」の句作が見える。范仲淹「岳陽楼記」にも「虎嘯狼啼」の語が出る。

〔付記〕二〇〇九年八月一日にサン・リフレ函館で開催の和漢比較文学会東部例会（第一〇四回）における発表「中島敦における「記」と「伝」」の一部を原稿化したものである。会場ならびに懇親の席で各位から頂戴したご教示にお礼申し上げる。

（早稲田大学教育・総合科学学術院）